## 『国文学攷』分類総目録（第151号～第200号）

凡　例

○　『国文学攷』第151号から第200号に掲載された論文その他を分類し、一覧した。

○　論文の配列は、以下の方針によった。

・　国語学は論文の内容に従って細目を立て、その中の配列は概ね時代順とした。

・　国文学の上代、中古、中世、近世は概ね国文学研究資料館編『国文学年鑑』（至文堂）の分類に従って配列した。なお、中古の作品の注釈等で中世に成立したものを扱った場合は、検索の便宜を考えて中古に所属させるなどの処置を取った。

・　国文学の近現代に関しては、主として扱う作家の呼称の五十音順に配列した。

○　記載事項は、論文表題、著者名、号数である。なお、論文標題の表記が表紙と本文とで異なることが少数ながら存在するが、その場合は本文の表記に従った。

○　発行年月は省略した。151号は平成８年９月発行で、以後合併号（第176・177合併号は平成15年３月、第192・193合併号は平成19年３月）を除いて12月、３月、６月と３ヶ月おきの刊行となる。

### 国語学

#### 文字・表記


『今昔物語集』における漢字表記の擬声語について　松尾　樹里　194

平安時代後半期の和化漢文資料における疑問助字の用法
— 表記主体の社会的属性の違いに関わる用字法の差異について—　磯貝　淳一　157

妙本寺本『曽我物語』の「則」字訓について　橋村　勝明　157

妙本寺本『曽我物語』の「是」字の用法とその訓とについて　橋村　勝明　164

和化漢文資料の疑問表現における助字の用法 —「歟」字の使用をめぐって—
磯貝　淳一　164

真名本『詠歌大概』論述部の和化漢文について — 和化漢文の解読・訓読のために—
田中　雅和　171

『捷解新語』におけるタ行オ段拗長音の頭子音のハングル表記について
李　東郁　179

『琉球譯』エ段音の漢字表記について　趙　志剛　187

CMCにおける感情表現記号の機能に関する考察　尹　祥漢　200

### 音　韻

唐招提寺蔵『孔雀経音義』院政期点の声調体系 ―反切を有する前半部分について―　佐々木　勇　169
声明譜から見た入声音の音価　浅田健太朗　192･193
清原宣賢の漢音声調 ― 十六世紀前半の実態把握のために―　佐々木　勇　154
日本語俗語の音声的特徴　町　博光　165

### 語彙・意味

平安時代和文における嫌悪の心情形容詞「いとはし」「うとまし」　世羅　恵巳　174
平安・鎌倉時代の和文における「はつ(果)」「をはる(終)」の意味用法
　―補助動詞的な複合動詞後項の意味用法の通時的研究のために―　岡野　幸夫　152
小さな語誌 ―「雑熱」について―　位藤　邦生　156
「減氣・験氣・元氣」小考　栾　竹民　159
「遠慮」の通時態　栾　竹民　174
日本における「道」の受容と展開 ―「芸道」の生成を一階梯として―　栾　竹民　180
「かるがゆえに」追考　鈴木　博　182
上代における下二段活用動詞「アフ」及び「アヘテ」の意味・用法について
　―《動詞連用形＋接続助詞テ》型副詞の典型としての考察 ―　小倉　健太　199
移動動詞語彙の体系化 ― 経由位置を基準とする移動について ―　荒田　玲子　170

### 語　法

「いかにも」の語史 ― 副詞の文法化の一類型 ―　中川　祐治　192･193
古代語における極度・高度を示す程度副詞の機能と体系　中川　祐治　166
中世末期における指定辞「ぢゃ」の構文的機能について
　―『天草版平家物語』と原拠本『平家物語』との比較を手がかりに―　中川　祐治　169
日本語の存在構文とその存在構文からみた動詞の意味と構文の意味とのかかわり　于　康　192･193
自動詞使役構文の意味特徴 ― 被使役者が非情物の場合を中心に ―　鈴木　容子　196
談話における接続詞「で」の用法 ― 女性話者の談話を対象として―　山本　貴昭　181

### 文章・文体・表現

『今昔物語集』における副詞「イマダ」の性格について　青木　毅　182
『今昔物語集』における「アヒグス(相具)」の文体的性格について　青木　毅　194
副詞「イマダ(未)」の用法から見た『水鏡』の文体的性格　青木　毅　178

『水鏡』における複合動詞の諸相 ―文体分析のための基礎的調査として―
青木　毅　190
鵜飼石斎付訓『四書大全』異版間に見られる訓読の異同　永松　寛明　168
天理図書館蔵『狂言六義』の待遇表現 ― 一人称代名詞を中心に―　林　弘子　196
会話の優先的な構造が参与者にもたらす影響
―模擬医療面接場面における学生の「情報提供」に注目して―　脇　忠幸　194

**辞書・資料**

『琉球館訳語』の成立は〈15世紀初〉に非ず　胤森　弘　156
『蒙求抄』古活字版の錯簡について ― 異化・変容・生成 ―　鈴木　博　162

**方　言**

方言呼称に現れる地名　上野　智子　165
大崎下島大長の数量副詞語彙にみる個人性と社会性
― 数量〈多〉と〈少〉のカテゴリーの場合 ―　岩城　裕之　160
副詞「たっぷり」の用法にみる個人性と社会性 ― 広島方言若年層話者の場合 ―
岩城　裕之　169
広島県大竹市方言における疲労感を表す形容語彙　花岡　健吾　175
島根県隠岐郡五箇村方言の性向語彙における造語法(2)
― 形容詞と形容動詞の語形成法 ―　灰谷　謙二　165
身体着脱動詞語彙の地域性 ―大阪方言と熊本県下益城郡砥用町方言を例として―
井上　博文　165
九州地方域方言におけるキリシタン語彙pater/padreの受容史についての地理言語学的研究
小川　俊輔　192･193
沖縄津堅島方言の場所格を表示する格助詞の機能についての新しい知見
又吉　里美　190
沖縄津堅島方言の比較基準を表示する格助詞の機能について　又吉　里美　192･193

**対照研究**

中日両国語に於ける「あいさつ」についての比較対照研究
―大学生の「家庭」「訪問」「公園」での「あいさつ」言語行動を中心に―
施　暉　174
日中両国語におけるあいさつ言語行動についての比較研究
―「道」「買物・食事」でのあいさつを中心に―　施　暉　188
中日両国語に於ける「和平」と「平和」について　栾　竹民　186

あいさつ表現の中・日比較文化的研究 ―「帰宅」におけるあいさつを中心に―
張　　磊 192·193

## 国文学

### 上　代

石上の祝婚歌 ― 万葉集二九九七番歌の原姿 ―　守屋　俊彦　159

### 中　古

『拾遺集』の仏教的特質と花山院の宗教生活 ―花山院撰者説研究の一環として―
今野　厚子　181
『伊勢物語』の歌の手法について―新しい歌語の創造性―　鎌田　清栄　151
『うつほ物語』俊蔭の「忍辱」―琴の一族と皇室―　猪川　優子　170
『源氏物語』論 ―〈産む性〉と『源氏物語』テキストの「対話」―　村山　太郎　186
近江の君の出自と人物造型 ― 妙法寺の別当大徳と猿女にかかわって―　原田　敦子　167
講釈聞き書きから注釈書へ
―『源氏物語抄（紹巴抄）』の写本、古活字本、そして整版本―　妹尾　好信 192·193
中京大学蔵奈良絵本『源氏物語』―松風・朝顔・行幸巻について―　小林美和子　162
『夜の寝覚』における髪の表現 ―『源氏物語』宇治十帖の引用を糸口に―
赤迫　照子　170
『夜の寝覚』の宇治十帖引用の方法 ― 脱却と依存について―　赤迫　照子　178
『虫めづる姫君』考　竹村　信治　153
『虫めづる姫君』の地平　井上　新子　158
『よしなしごと』の〈聖〉と〈俗〉　井上　新子　170
『とりかへはや』蓬莱氏本系統の伝本をめぐる考察 ―本居宣長の奥書を起点として―
西本　寮子　178
石川雅望筆『とりかへばや』の行方　新居　和美　191
水音なき鳴滝 ― 蜻蛉日記「鳴滝籠り」の意義―　原田　敦子　160
『和泉式部日記』の主題と方法 ― 歌物語的共感世界の〈明〉と〈暗〉―　阪本　　愛　153
主家賛美と憂愁叙述 ―『紫式部日記』行事記録の方法―　原田　敦子　188
『枕草子』と仏教言説　武久　康高　171
『枕草子』積善寺供養章段の構成 ―時間軸の不統一とモザイク的様相―
古瀬　雅義　187

### 中　世

絶海中津の関東再遊について　朝倉　　和　163

五山文学における「和韻」について ― 絶海・義堂を中心に ―　朝倉　和　179
義堂周信『空華集』をめぐって ― 禅林文学研究者の憂鬱 ―　朝倉　尚　185
「少年老い易く学成り難し」詩の作者は観中中諦か　朝倉　和　185
顕昭判詞にみる先行表現摂取の方法に対する認識 ―『千五百番歌合』を中心に―
山崎　真克　166
定家と「暗雨打窓声」―日記において和歌において―　藤川　功和　166
正治二年十月十二日通親家影供歌合の「叡感」について
―後鳥羽院の和歌賞詞をめぐる一考察―　田野　慎二　171
冷泉家本『明月記』天福元年十月記仮名書き記事読解稿
―定家と真名・仮名とをめぐる一試論―　藤川　功和　182
建長三年九月十三夜影供歌合再考　藤川　功和　192･193
天草本平家物語の構想 ―イエズス会文書としての側面―　辻野　正人　185
『今鏡』の章段名の性格 ― 和歌との関わりから―　陳　文瑤　191
冷泉家時雨亭文庫本『十六夜日記』について　江口　正弘　160
平経高と六条宮―『平戸記』に見られる順徳院思慕のかたち―　藤川　功和　152
『言継卿記』十炷香懸物記事と謎立 ―室町後期廷臣における古典享受の一様相―
相原　宏美　192･193
『山路の露』伝本研究 ― 二類本九本の位置付けについて―　岡　陽子　175
『山路の露』の小君と右近 ― 空蝉物語・玉鬘物語との関わり―　小川　陽子　189
『雲隠六帖』伝本研究 ― 別本系統諸本の相互関係について―　小川　陽子　183
兵庫県極楽寺蔵『六道絵』の〈絵語り〉　井上　泰　200

### 近　世

宝暦十二年江戸冷泉派の点取和歌（上）　久保田啓一　154
宝暦十二年江戸冷泉派の点取和歌（下）　久保田啓一　155
『藤箋冊子』「花園」の構想 ―江村北海『虫の諫』との比較を通して―
正本　綏子　155
「秋山記」冒頭における『伊勢物語』第一六段踏襲の意図　正本　綏子　157
『今世名家文鈔』の出版過程 ― 僧月性顕彰会所蔵月性来簡群にみる―
蔵本　朋依　164
『可笑記評判』考 ―『可笑記』に対する批評の視座―　末松　昌子　198
江島為信の儒学と兵学 ―『古今軍理問答』の「理」―　奥井　康方　180
江島為信『古今軍理問答』と『太平記評判秘伝理尽鈔』―楠正成の評価をめぐって―
奥井　康方　190
『ぬれほとけ』の「心鏡」　松浦　恵子　183

『ぬれほとけ』の「修行」と「知恵」―上・中巻の教訓を支える考え方―　松浦　恵子　186
『吉原伊勢物語』の改竄に込められた意図　松浦　恵子　168
「西鶴独吟百韻自註絵巻」と『西鶴織留』―対応する語句から見えるもの―　佐伯友紀子　195
鬢五郎の造型―三馬『浮世床』を継承する鯉丈の意識に即して―　正木　未来　199

近現代

〈売文〉小説とメタ構造 ― 芥川龍之介「奇遇」試論 ―　大西　永昭　198
芥川龍之介「点鬼簿」論 ― 家族の肖像―　相川　直之　163
安部公房作品における不整合　田中　裕之　163
荒川洋治「眼帯」論　吉田　敬　187
荒川洋治「こどもの定期」論　吉田　敬　195
転向論における「記者的姿勢」（上）―磯田光一『比較転向論序説』の戦略の脱政治性―　柳瀬　善治　155
転向論における「記者的姿勢」（下）―磯田光一『比較転向論序説』の戦略の脱政治性 ―　柳瀬　善治　156
「流転」成立考 ― 井上靖文学生成の一過程 ―　高木　伸幸　156
井上靖「貧血と花と爆弾」論 ―「真物」の男たちの「熱情」―　高木　伸幸　159
「氷壁」論 ―「孤独」と「信頼」―　高木　伸幸　167
「ジョン万次郎漂流記」から「中浜万次郎」へ ― 個人の追求から〈異人〉の問題へ―　鄭　寶賢　173
宇野浩二の批評性 ― 大正時代中期の言説状況と「蔵の中」―　谷　彰　169
透谷を嗣ぐ人びと― 雑誌「詩精神」と梅川文男 ―　尾西　康充　176·177
大江健三郎と武満徹 ― 交流の初期における内的呼応―　村瀬　良子　152
出発期の大江健三郎 ― 膨らむ喉・響く声 ―　村瀬　良子　176·177
「セヴンティーン」・「政治少年死す」論 ―「純粋天皇」の考古学 ―　川口　隆行　153
『個人的な体験』論 ― 作品評価とモラルの水準 ―　村瀬　良子　159
GHQ／SCAP占領下の大田洋子　岩崎　文人　197
葛西善蔵の方法 ―「蠢く者」を中心に―　樫原　修　176·177
梶井基次郎「檸檬」論 ―「触媒」としての〈檸檬〉とその力 ―　藤村　猛　154
柄谷行人の現在 ― 新たな〈転回〉―　綾目　広治　168
川端康成『禽獣』論 ― 揺らぎ続ける「モラル」の位相―　坂元さおり　162
「楚囚之詩」論 ― 北村透谷における〈自己処罰〉の衝動―　尾西　康充　189

北村透谷における平和思想の再評価 —クエーカーと「慈善事業の進歩を望む」—
尾西　康充　183
「新しき村」運動の一波紋
—「新しき村」福岡支部と新資料　倉田百三・武者小路実篤書簡—　岩崎　文人　158
小林秀雄と大正期の思想 — 和辻哲郎、西田幾多郎との連続性—　綾目　広治　180
緑雨・女性憎悪のアフォリズム
— 兆民訳「情海」・秋水訳「情海一瀾」・鷗外訳「毒舌」に見る、西洋アフォリズムとの交差—
塚本　章子　189
緑雨と秋水 — それぞれの「非戦論」—　塚本　章子　184
佐々木基一記念文庫について　位藤　邦生　158
佐々木基一さんのプロフィール　好村冨士彦　158
戦後文学と佐々木基一　槇林　滉二　158
志賀直哉の小説における人称 —「自分」・「私」・「彼」のあいだ—　下岡　友加　188
志賀直哉「或る男、其姉の死」論 —「事実と作り事との混合」という方法をめぐって—
下岡　友加　160
志賀直哉のリアリズム、その実相 —「灰色の月」を中心に—　下岡　友加　172
柴田　翔—『されどわれらが日々—』からの成熟　綾目　広治　197
『道化の華』—「僕」に関する考察—　高橋恵利子　151
太宰治「女生徒」試論 —『有明淑の日記』からの改変にみる対川端・対読者意識—
何　資宜　196
『山月記』の五つの謎 — 撞着語法と対照法の罠—　柳沢　浩哉　179
中島敦「斗南先生」論 — 東洋精神の博物館的標本—　孫　樹林　181
「光と風と夢」の一試論 —「光」をめぐって　洪　瑟君　200
「坊っちやん」論 — 写生文、あるいは一人称回想への眼差し—　山下　航正　167
『坊つちやん』とスティーブンソン「ファレサアの浜」
—不完全なヒーロー像と植民地主義的な構造について—　レオン・ユット・モイ　198
夏目漱石「永日小品」考 —「三四郎」と「それから」の間で—　二宮　智之　172
漱石の『門』と春園の『土』—「開化」と「改造」をめぐる比較考察—　李　美正　184
中日両国の近代化と魯迅・漱石　李　国棟　176·177
『夏の花』（原民喜）三部作とその周辺 — 陸軍用達商一家の興亡と再生 —（一）
岩崎　文人　176·177
樋口一葉「闇桜」考 — 同時代の「恋」をめぐる言説の中で—　塚本　章子　162
〈雪の日〉— 一葉日記における天気記述を巡って—　棚田　輝嘉　176·177
三島由紀夫「薔薇と海賊」論 —〈眠れる森〉の眠らない童話作家—　有元　伸子　197
三島由紀夫「鏡子の家」論 — 作中時間の構成について—　九内悠水子　172

『豊饒の海』における月･富士･女性 ―『竹取物語』典拠説の検討―　有元　伸子　151
宮沢賢治・封印された「慢」の思想 ― 遺稿整理時番号10番の詩稿を中心に―
木村　東吉 176･177
宮本百合子『伸子』―主体における切断と重層について―　遠藤　伸治　175
武者小路実篤『友情』論 ―作中人物におけるジェンダー言説に着目して―
楊　琇媚　184
村上春樹「風の歌を聴け」論 ― 物語の構成と〈影〉の存在―　山根由美恵　163
村上春樹「中国行きのスロウ・ボート」論 ―対社会意識の目覚め―　山根由美恵　173
〈ひねくれ〉の語り ― 村上春樹「カンガルー通信」におけるねじれの構造 ―
山根由美恵　191
「螢」に見る三角関係の構図 ― 村上春樹の対漱石意識 ―　山根由美恵　195
村上春樹『海辺のカフカ』論 ― 性と暴力をめぐる現代の神話 ―　遠藤　伸治　199
『耕土』大観堂版の成立 ― 雑誌初出本文と対比しつつ―　村上　林造　176･177

## 国語教育学

時枝「たどり読み」論の再検討　吉田　裕久　161
異化の詩教育学　足立　悦男　161
テクストの多声性と読者の〈物語〉
―宮沢賢治「おいの森とざる森、ぬすと森」の授業実践記録を手がかりとして―
山元　隆春　161
読みの学習指導の基礎理論的研究 ―あそび研究との関連を中心として―
住田　勝　161
「テクスト」が誕生する〝場〟をめぐって ― 文学の読みの原理的研究のために ―
山下　航正　197

## 中国語学・中国文学

現代中国語における新語の語彙的諸相について　常　志斌　171
東晋の詩　長谷川滋成　173